

氏名(本籍)	宮田 <sup>みやた</sup> (江田 <sup>えだ</sup> )香織 <sup>かおり</sup> (東京都)			
学位の種類	博士(体育科学)			
学位記番号	博甲第5796号			
学位授与年月日	平成23年3月25日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
審査研究科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	対話的競技体験によるアスリートの自己形成の促進			
主査	筑波大学教授	博士(体育科学)	中込四郎	
副査	筑波大学教授		岡出美則	
副査	筑波大学准教授	博士(心理学)	坂入洋右	
副査	筑波大学教授	医学博士	小玉正博	

## 論文の内容の要旨

### (目的)

本論文は、スポーツ心理学領域で重要な研究課題となってきた競技スポーツ経験がどのようにしてアスリートのパーソナリティ形成につながるのかといった疑問に答える研究として位置づけられる。本論文では、①アスリートの自己形成を本来感と随伴的自己価値の二側面から捉え、彼らの自己形成の特徴を明らかにする、そして②アスリートの自己形成における「対話的競技体験」を通じた外的自己体験の内在化について検討する、といった2つの目的を設定した。

### (概要)

各検討課題にそって本論文の概要を述べる。

#### 1) 随伴的自己価値がアスリートの精神健康に与える影響

アスリートの自己形成を Kernis の理論に基づき随伴的自己と本来感の二側面から捉え、それらが精神的健康に与える影響について非アスリートとの比較を通して検討した。その結果、本来感はアスリート・非アスリートともに精神的健康を促進していたものの、随伴的自己価値ではアスリートのみ不安と不眠を促進する影響が認められた。しかし、その影響はさほど大きなものではなかった。

#### 2) 愛着の確立レベルがアスリートの自己形成に及ぼす影響

自己形成の基盤として愛着を位置づけ、愛着の確立レベルが自己形成に与える影響について検討した。学生アスリートを対象者として、随伴対象を競技に限定している者とそれ以外の者に分け、競技意欲、自尊心、自己受容等の心理変数との関係について両群の比較検討がなされた。その結果、アスリートの自己形成においては、随伴的自己価値は二律背反的であり、自己概念に関わる側面を抑制するが、競技においては意欲を高め、促進力となっていることを明らかにした。

#### 3) アスリートの相談事例に見られる自己形成の特徴

相談室を訪れたアスリートの相談事例から、外的自己体験を内化し、内的自己の発達に繋げる要因について明らかにした。検討された事例は3名のアスリートであった。その結果、来談に至るアスリートは自己形成を果たす上で、競技体験が外的自己の強化に繋がるのが非常に多く、内的自己の発達に繋がる経験と

なり難いことが明らかとなった。また、こういった自己形成に共通する4つの阻害要因として、自己信頼感の不足、主体性の欠如、自己充足感のうすさ、競技への過剰適応、が認められた。

#### 4) 対話的競技体験とアスリートの自己形成との関係

外的自己体験を内在化する要因として「対話的競技体験」を措定し、自己形成との関係について検討した。本論文では対話的競技体験を「競技体験の中で自分自身の身体に注意を向け、身体と対話を行うことを通して、自分自身との対話を行う体験様式」と操作的定義を施し、対話的競技体験尺度を作成した。その結果、対話的競技体験は、体験への信頼的態度、競技体験を通して自分に向き合おうとする態度、体験や競技への主体的関わり、気づき・洞察、といった要因から構成された。さらに、このような対話的体験を深めている者は、内的自己の発達を伴った自己形成を遂げていることを明らかにした。

#### 5) 内的自己の発達を伴った自己形成を導く対話的競技体験

対話的競技体験が外的自己体験（競技経験）をいかにして内在化を引き起こし、内的自己の発達を伴った自己形成へと繋がるのかを検討した。内的および外的自己発達を査定する質問紙を用い、内的発達を伴った自己形成を遂げているアスリート（成熟群）と、内的発達を伴わなかった（繋がらなかった）アスリート（随伴群）の典型例を各群3名ずつ抽出し、対話的競技体験に関わる情報収集を目論んだ半構造化面接を実施した。その結果、成熟群の者は、身体を通して自身の体験に注意を向けることによって、自己洞察を深め、自己形成を促進していることが認められた。

#### (結論)

以上の検討結果を踏まえ、本論文は、①アスリートは、彼らの置かれた競技環境より、競技による外的自己に偏った自己形成となることが少なくない、②外的自己体験を内在化し、内的自己の発達に繋げるためには、身体活動の中で身体を通して自分自身と向き合う対話的競技体験が必要である、と結論した。

### 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は競技スポーツにおけるどのような体験がアスリートのパーソナリティ形成に繋がるのかといった研究課題に対して、新たな体験要因として「対話的競技体験」を措定し、その有効性を実証した。したがって、スポーツ経験とパーソナリティ形成の関連性に関わるこれまでの因果的説明を補完することになり、高い評価が与えられる。一連の研究の中で著者が開発した「対話的競技体験尺度」は、今後、スポーツ心理学領域での広義のパーソナリティ研究においても適用可能性が高く、さらに、理論的裏づけや尺度としての洗練化を図っていくことが期待される。また、コーチング現場でのアスリート養成に対して、示唆に富む提言に繋がる研究の積み重ねが望まれる。

論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。